

## どうして言葉は突き上がってこないのか

「ある夜、街灯近くで捜しものをする人に会う。一緒に探すがいっまでもたっても落とし物は見つからない。そこで、この近くで落とししたのは確かなのかと尋ねると、いや失ったのは他の場所だが、そこは暗くて何も見えない、だから街灯の下で探していると答えたという。」

この話をある文章の中で知って以来、脳裡にこびりつき、折に触れて思い起こすようになった。この話を書き留めた社会心理学者の小坂井敏晶は、近代市民社会では、自由な存在である人間の意志決定に基づいて行為が導きだされるという考えがその根本を支えてきたが、そうではないのではないかと、人間は意志決定によって選択されたとはけっしていえない行為を遂行してしまう存在なのではないかと、だがそうであるなら、人間にとって責任という問題とはなにか、がそこでは問われていることになる、という問いの文脈の中にその冒頭の話をもちだしている。

《常識の罟。我々も探すべきところを探さずに、慣れた思考枠に囚われていないか。自由や責任を因果関係で理解する発想は、この街灯の光に相当しないだろうか。問題解決を拒むのは知識不足ではない。反対に常識という名の余分な知識が眼を曇らせる。特に倫理観はしぶとい。自由意志を疑問視するだけで感情的になる人もいる。慣れた価値観を新たな眼で見直すのは想像以上に難しい》と、「責任という虚構」(『UP』09. 1)という一文の中で説明されている。

原因は一つの結果をもたらすとは限らず、無数の行為を生みだし、無数の結果を生じさせるにちがいない。その考えは当然、原因を重視し、結果を軽視する。この考えを近代社会が容認できないのは、無数の結果をもたらす原因を問題視することは、一つの結果を選択してあらわれている社会秩序を混乱に陥れるからだ。したがって、結果を重視して、結果に見合った原因が探索されていく。結果から原因を探しだす行為は、冒頭で引用した、暗闇では捜しものが見つからないから、明るい街灯の下に移動して探しつづけることに似ている。もはやそこでは捜しものを見つけるのではなく、探しつづけるということに移動してしまっている。この挿話はもちろん、落とし場所が暗すぎて探すことができないとき、私たちはどうすべきか、という問いを提出している。落とし物を見つけるためには、それでも手探りで探しつづける以外に術はないのに、人間はしばしば落とし物を明るい場所で探しだそうとする。

ここで明白なのは、暗闇での落とし物探しはいつかは落とし物を見つけることができるかもしれないのに対して、明るい場所に移動した落とし物探しは絶対に落とし物を見つけることはできないということである。では、なぜ人間は暗闇から街灯下に移動物探しの耐えられるけれども、暗闇での落とし物探しには耐えられないからだろうか。この時点で、落とし物探しは「見つける行為」から「探しつづける行為」へと移動している。同じ見つからないのであれば、街灯下を探すほうがよいということだ。なにを探すのかが忘れ去られて、探すことそのものが目的と化しているのである。

そのときはそう考えたが、どこか釈然としなかった。先の著者の説明にも納得できなかった。この話はそれらの説明では収まらないなにかを含んでいるように感じられるのだ。そのなにかが引っかかっている、この話だけが文脈の中からぽっかりと浮かび上がって、私を照らしだしているのである。たぶん私もなにかを探しつづけているからだろう。いうまでもなく「落とし物」は落とし場所ですぐに探すべきでない。たとえ暗くてなにも見えないとしても、そこに蹲るほかない。しかし、そこが「暗くて何も見えない、だから街灯の下で探している」ということは、おそらくなにかを探しつづければよい、ということ象徴しているにちがいない。

なにかを落としたことは忘れていない。だがどこで落としたかは忘れられつつある。「暗くて何も見えない」場所で落としたのに、探せないから明るい街灯の下に移動して探しているということは、「暗くて何も見えない」場所で落としたことも忘れられて、明るい街灯の下でなら、見つかりそうに

思われているということではないか。ここで落とした場所が忘れられつつあるだけではない。なにを落としたのか、落とした物まで忘れられつつある、ということが、この話では大変重要だと思われる。

探しているうちになにを探しているのか、しかもどこで落としたのかも忘れつつある、というこの姿は、戦後の日本人のありようそのものではないか。思わずそう言いたくなるが、戦後日本人全体の問題以前に、その紛れもない一人であるお前自身はどうか、について語らなければ、卑怯さを免れない気がする。話の中の「捜しものをする人」は私自身でありながら、同時に戦後日本人でもあることを押さえておかなければならない。そう思いながらも、はたして戦後の日本人は探しつづけているだろうか、という深い疑念にも囚われている。この話とは違って、探すことすらしていないのではないか。もしそうなら、探すことだけはけっして諦めていない私は、戦後日本人からも逸脱しようとしている。

冒頭の話がいつまでも脳裡にこびりついているのは、「街灯近くで捜しものをする人」は自分自身であり、自分について語られているから、この話が忘れられなかったのだと、いまにしてははっきりと思う。私が「暗くて何も見えない」場所でなにかを落としたけれども、そこは探せない場所だったので、街灯の下に移動して何十年も探してきたことに間違いはない。「暗くて何も見えない」場所で探しつづけることに疲れるよりも、街灯の下に移動して探しつづければ、なにかが見つかるかもしれないし、もしかすると、そこで見つけた物は落とした物に匹敵するかもしれない、と考えたのだ。

「暗くて何も見えない」場所で探しつづけることの孤独の深さに耐えられなかったのである。街灯の下に群れ集う人々から遠く離れて、独りで「暗くて何も見えない」場所でおそらく一生かかって探しつづけても見つけられないかもしれないということは、気が狂いそうになる恐怖なのではないか。なにかを落としたことははっきりしているが、なにを探しているのかが自分には皆目見当が付かないということが、恐怖をより一層募った。しかし、明るい街灯の下ではなにも見つからなかった。探しつづけていたからこそ、見つからなかったのだ。明るい街灯の下にはなにもない、ということを確かに発見したのである。無駄ではなかった。「暗くて何も見えない」場所に赴く踏ん切りがついたからだ。

落とし物を探すのはいつも「暗くて何も見えない」場所である。明るい街灯の下で探すことは起こりえない。「暗くて何も見えない」場所で見つけることができなければ、どの場所でも見つけることはできない。「暗くて何も見えない」場所にしか落とし物はないからだ。いいかえれば、「暗くて何も見えない」場所だからこそ、探して見つけてなくてはならないのである。だが「暗くて何も見えない」場所でなにが見つけれられるのか。もちろん、「暗くて何も見えない」場所で見つけるのは、光以外にない。光を見つけないかぎり、そこでなにも見つけることはできないし、それ以上のものはありえない。

明るい街灯の下には光は不要である。街灯の明るさは光とは全く異なるが、光を真に求める場所はずっと「暗くて何も見えない」場所だからだ。私が蹲ろうとしている「暗くて何も見えない」場所が求めている光は、言葉である。あるいは、滾っている無言である。言葉が噴出する無言の闇に深く包み込まれるのを願っている。「暗くて何も見えない」場所から明るい街灯の下に移動して、落とし物を探そうとしたとき、「暗くて何も見えない」場所でこそ光を探さなくてはならない行為は断たれてしまった。敗戦直後の「暗くて何も見えない」場所に蹲っていた日本は、その暗さに耐えきれず、光を見つけることを放棄して、明るい街灯を求めていったのだ。そして、原発は爆発した。

作家の野坂昭如（80）が『サンデー毎日』（5月29日号）への寄稿文の冒頭を、《言葉が上滑りしている》とはじめ、《思考停止と想像力欠如、この二つが戦後をつくってきた》が、《人間は唯一言葉を発する動物。この言葉さえ失いつつある》と、震災を前に苦汁を発するとき、《思考停止と想像力欠如》のほうで戦後復興の邁進に役立つとみなされてきたこと、明るい街灯の下では《言葉が上滑りしてい》き、肝心なことを語るための《言葉さえ失いつつある》ことが見据えられていた。付け加えれば、《言葉さえ失いつつある》ことが、言葉が突き上がってくる場所が失われつつある問題として捉えるなら、言葉を「暗くて何も見えない」場所での光として生み出してきた人間は、これまでの言葉を失って、「暗くて何も見えない」かつての場所に戻りつつあるのだろうか。